

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

山下泰幸

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院文学研究科

【研究題目】

現代フランス社会のイスラモフォビアおよびそれに起因する国外脱出の研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、フランスで生まれ育ったイスラーム教徒の国外脱出的な移住の実践について、質的調査に基づいて実証的に明らかにするものである。

過去 30 年でフランスを離れ国外移住する者が激増しているが、その多くは高学歴の人びとに偏っており、ミドルクラスの一部がグローバル経済に取り込まれる形でトランスナショナルな移住を行っていることが知られている。一方、イスラーム教徒がスティグマ化され、イスラモフォビア(イスラーム嫌悪)の国家的な制度化が進行するフランスでは、ムスリムがキャリア形成上の不利やマイノリティとして生の困難さに直面していることが一部の先行研究で明らかにされてきた。こうした状況においては、国外移住者の中に多数のムスリムが含まれることは想像に難くないと言える。こうしたイスラモフォビアをプッシュ要因とするトランスナショナルな移住現象については、いくつかのメディア報道や反イスラモフォビア団体の関係者によってその存在が言及されてきたものの、実証的な研究がなされてこなかった。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、フランスのミドルクラスのムスリムは、イスラモフォビアに起因するキャリア上の不利から逃れるために、トランスナショナルな移住を行っているという仮説を検証する。2017 年頃から、博士論文の執筆のための調査として、フランス・パリ付近にて、同国で生まれ育った北アフリカ(アルジェリア、モロッコ、チュニジア)系二世のミドルクラスのムスリムに対するインタビュー調査を断続的に実施してきたが、これらインフォーマントの実に半数近くが 2023 年現在フランスを離れ、それ以外の国へと移住していた。そこで本研究では、過去にインタビューを行った人びとに再度のインタビューを実施するとともに、フランス国内において海外移住を準備しているものや、他国におけるフランス出身ムスリムのコミュニティに対する調査を実施した。

例えばフランスで生まれ育ち、現在はドイツに移住しているアルジェリア系二世のムスリム男性であるヤセフ(仮名)のライフストーリーに注目すると、彼はサラフィー=ジハード主義のような過激思想と全く無縁の人物であったが、2015 年のパリ同時多発テロ事件の直後、ムスリムに対する「集団的懲罰」の様相を呈した、当人に何の謂れもない家宅捜索を経験した。彼は移民第一世代に当たる両親から、アルジェリア独立戦争におけるフランス軍による親族の殺害や拷問という植民地主義暴力の記憶を継承しており、こうした過去の記憶と現在のポスト植民地的な政治的暴力が重なることで、フランスにとどまることに脅威を強く感じ、移住を決定していた。移住においては EU 域内移住という固有の政治状況の下で、高い学歴や言語能力という豊富な移住資本が有利に働いていた。

【結論・考察】(400字程度)

上の分析を一例とするようなトランスナショナルな移住現象には、ミドルクラス移民研究において主題とされてきたような、ミドルクラスのフランス人が保有しがちな多様な移住資本を活用した主体的な選択としての側面があると同時に、強制移動研究において分析されてきたような政治的暴力の被害者としての生の側面を伴うものである。西洋の「先進国」であるフランスのからのムスリムの国外移住現象は、複数の文脈が複雑に重

なり合う中で生じており、経済・文化・政治のうちの単一の側面からそれを分析することは、その複雑なダイナミズムを捉え損ねてしまう結果となる。今後の研究においては既存の難民研究とミドルクラス移民研究を架橋する必要があることに加えて、フランスと移住先社会との間でのマイノリティ・ムスリムをめぐる社会的状況について、歴史的文脈を精査しながら比較することも重要であり、こうしたアプローチにより、いまだ定式化されているとは言い難いイスラモフォビア研究への理論的な貢献が可能となるだろう。